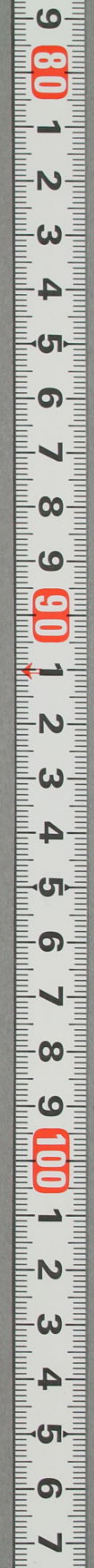




神功
皇后
三韓退治圖會
二

~13
3914
2





神功皇后三韓圖會卷之二

目錄

- 熊鷹語夷守於種姓陣没
- 檜隈安良於筑紫海濱落命
- 夷守遇陳倫託阿誤
- 陳倫乘扁舟遁危急
- 仲哀帝於檀日宮崩御
- 皇后自為神主問神祇尊号

天正十年八月廿九日
本大學出版部贈

熊鷹語夷守於種姓陣没
檜隈安良於筑紫海濱落命



○ 皇后於玉島川釣香魚

○ 武内命年磨令造櫓

○ 安部介丸遇靈魂知宝劍在處

○ 割織中毒酒歿非命

○ 武内射陳倫報主仇

○ 鵬送孤兒於韓土

○ 筑前生松原之來由

以上

神功皇后三韓圖會卷之二



平安 山月庵主人 編述

熊鷹語夷守於種姓陣没

却て説不知火が嶽る。羽白の熊鷹ハ側室多かるが中ハ夷守と喚ぶ。国
色類いさ。且心ざるも優美かり。程ふ然る荒戒の意も。深く睦と語
ひく。一人の子を生し。是と能阿誤と号け。唯掌中の珠と愛いつく。一
育てたるが。元来熊鷹ハ此年未掠奪。數の財宝。太刀劍綾錦。兵具の類ハ
庫ふ元満く。須達阿育が富貴も。何らか。ぬ身とありし。自ら
心怠りて。只日夜醜樂とこ。更ふ軍吏と顧すありしが。天皇自か。ら
不知火が嶽へ向ひ。つと閑る。熊鷹ハ厚鹿丈。鹿丈の兩人ハ幾千の
賊兵と添え。山の麓で出張せ。防ぎ戦ふ。つと争り。天誅免ん
き。股肢の腹臣と憑る。厚鹿丈。鹿丈も空。陣没す。其他ハ島合の

草賊さすべ或降り或撃た。今早官軍出塞近く攻寄す。熊鷹ハ自ら
ら戈と奪て數々官軍と挑む戦ふ。官軍ハ新入替々々吾撃取
んと闘く程。熊鷹ハ阿弥羅王の荒ら如く。四方八面と欠けたり。奮撃す
突戦す。刀尖より火の出る。戦ひ。今か。覺へ。且戦ひ
且走り。山寨の木戸と入て。嚴しく是を。慌忙。後宮ふ入る。
夷守やある夷守々々と喚ぶ。他の側室等ハ。落落失く。一人もあ
らふ。夷守の。阿方。阿と應え。熊阿誤といふ子
と。抱き。涙。即人の。近。熊鷹ハ斯と。恩愛の
涙。日頃我情と。幾人との。言。妻
も。唯一人。我先途と見届んとする者絶て。熊阿誤といふ
子。你的。我。世。嬉
限り。今我。諸共。死。生。易

し。と。夫。尚。何。此。左。右。其。阿。誤
と。守。育。一。度。ハ。我。鬱。憤。と。晴。早。と。す。ひ。夷。守。ハ。関。心
あ。だ。頭。と。右。左。打。う。と。君。の。仰。も。覺。え。と。ら。げ。妾。年。未。君。不。則
は。の。せ。此。阿。誤。と。生。て。の。室。と。同。く。死。て。の。穴。と。俱。ふ。と。誓
と。の。と。君。茲。ハ。陣。没。は。り。妾。一。人。生。存。命。日。う。げ。者。と。う。り。ゆ。れ。く。
彼。首。や。此。首。と。呻。吟。つ。天。高。多。く。脊。と。か。ぢ。地。厚。と。い。と。荒。く。る。ほ。ぞ。
木。も。茅。も。心。と。措。て。世。住。り。も。あ。ら。な。い。の。其。甲。斐。も。死。身。う。り。り。
妾。や。阿。誤。と。い。と。お。し。と。ひ。と。今。あ。と。童。一。と。い。ふ。刺。殺。し。眞。土。黄。泉
ま。い。り。夫。婦。諸。共。あ。る。ま。い。り。侍。と。疾。殺。し。と。身。と
と。ひ。け。覺。期。究。一。言。の。葉。ハ。潔。け。と。あ。り。子。が。落。る。涙。の。玉。霰。雪。と。見
ゆる。顔。も。せ。ふ。楓。と。う。り。う。り。桺。髪。風。不。乱。枯。野。原。時。も。雨。時。雨。也
嗚。呼。是。將。不。虞。が。楚。帳。と。辞。し。嫗。漢。庭。と。離。其。悲。喻。も。足。ら。ず。稍

あつて熊鷹ハ涙と拂ひ條が言とら道理なき。吾唯恩愛ふ迷う。此何誤
と助んといふあはれ。平素より身が其志のちやうやうと云ふ。吾亡
後ハ託しおれとて一美あり。といひけり。やとら宝藏の裡より。恭
一口の劔と拿出し。来りて夷守が辺り近く。おれ。你も未だ折る
て其委し。此と告ぐ。此劔を昔垂仁帝三年春三月。新羅の王子
天の日槍といへる者。此国へ帰化せし折り。持来りし七種の神宝の中。出石
の太刀と号す。所の宝劔なり。所謂其七種ハ羽太玉。足高玉。鶉鹿赤石玉。日鏡
熊の神籬。出石の鉾。出石の太刀是なり。彼日槍ハ但馬の国と賜ひ。世々
彼神宝と守りせし。日槍ハ其処ふりて。妻と迎え。子と生せ。斯く
日槍が曾孫清彦が代に當つ。天皇清彦よ詔して。彼七種の神宝と奉
らせり。清彦竊ふ。此出石の太刀と惜みて奉ら。是と取度して
自う佩つ。後此支頭とて。清彦ハ忽地誅せ。清彦尚此太刀と

深く石中ふ秘め。竟不度し。課せ。其子田道間守といへる者。不傳と
此名劔の有し。但馬八郡の。實我ハ其間守が曹とて。年未種姓と
隠し。此太刀と秘藏とて。既ふ久し。然るに。此太刀ハ原新羅の物。て
其来由と謂者。昔時新羅国の帝王の祖檀氏といへり。西方。飛翠と
いへり。山中ふ入。遊び。不測なる哉。巖の辺り。禽獸の多く。或
あはれ。怪し。彼巖と後者。命じて穿つ。其給
ひ。果して巖の中。一口の劔あり。帰館の後。つら。其見ある。世よ。ら
し。此名劔と。檀氏ハ深く愛せ。則ち巖の中より出。の。あ。と
出石の太刀と名。新羅第一の宝とす。常。刃を放ち。有。一日。玉杖の
より。彼。出石の劔と掛。暫。は。折。一。声。の
霹靂。つ。光氣。出石の劔の朝。む。け。入。檀氏。や。れ。よ。心
劔と取。て。尺。寸。今。手。で。より。其。重。さ。陪。せ。る。あ。ふ。於。て。或。道士。と。カ。ロ。て

ころ程小夷守ハ即人の遺言黙止ぐ。阿誤を携へ唯一人心づくの荒
 磯と歩むとすれど後髪引くが如覚ゆらふ。あはれなるがと我と吾心鬼
 小真破地とたれど兎角行悩々霎時憩ふ折くふ忽地後辺は箭叶の
 音轟く山寨の方ふ当つて猛火々々と燃上り。餘烟天と焦を形勢ふ
 借ハ夫の最期くとあへばいとも悲々々々唯遠近と眺るうち。日も暮
 て夕月の影も清朗大空ふ數行の雁西の方へと飛去と刃て。獨言ハ吾夫の
 遠祖ハ新羅の人とて其新羅ハ此より西の国と関は妾も彼鳥の如く。翼
 のあへば海原と打も渡りて遠くも。其韓国へ行めて。親族と尋ね此阿誤
 が身の上のそ太刀の度心るまゝ関を以て。商淺便もあふまふ。あふ甲斐
 る此女の身の誰と便りふ習よりハ身と立へるとさうりみく。又めや袖と
 めくす折しも。窺ひよつて一個の兵。後の方より声ともうけむ。左の肩先斬
 こふ。あはれ口惜や油断も。不覚を取らうりさうり。何者されば名もさ

のくす女一人と物々々々欺き撃とハ比奥る。と関より彼者冷笑ひ小ざ
 かり問ど哉吾ハ安部高丸が即等あ。檜隈の安良といふ者あり我五人
 の傘ふよつて。此磯ぞとふ網と張落人と待甲斐あつて。親鳥のそろ子鳥
 はぐ。爰ふ来るハ是幸い。今後あく立関バ汝が夫熊驚ハ新羅の人の未
 まりころ。殊も太刀とちんんと所持するより。其児諸共我と遊と。疾
 縛ちとらけよう。と右手とのぐりて懐は。抱ひて引くる熊阿誤と引出え
 とする手ふまぐり。とや此身のぬるも。阿誤やハ太刀とあつくと。敵の手ハ
 逆と。と傘限りと争へど。始めの深痕は身體もろ。あふが終は衝ら
 けど。安良ハ得ると。熊阿誤が襟髪宙ふ引提るを。倭燈まぐ草摺ふ
 ちり。とすぐると。丁と蹴返。雌手は刀とさうり。吐嗔とる間ハ彼は
 なる。浪打際ふ成り。芦の葉へむ吹通風うあ。ぬる散乱々々と。鳴
 とと刀ハ。強音高。丙と響きて一本の征矢飛来り。安良も肩まぐり

と立たば何なにらん以もつてななららるるべきべき。あつと叫こゑびびく熊阿漢くまあかんと其そのはは大地おほちにに捨すてて
後居のちゐりりとと侍しやうららししにに夷守いしやう苦痛くるうも打うちつつれれ走はしりりととくくど抱かかきき上げげ侍摩しやま
此危急このきんきつと救すくひひししんん神かみうう人ひとううと嬉うれししくくふ更さらは途方とちやうよよらられれししるる

夷守遇陳倫託阿誤

其時そのとき弓ゆみゆゆてて度たららるる芦あしと左右さやう小押せうおし分ぶん夷守いしやうが迎むかひひ近ちかく立たちち上ありり夷
守しやうの苦くるい息いきの下したよりより。稍すこく頭あたまと擡もちげげ先其人まづそのひとと視みるるふ年とし齡らう三十さんじゅうたたりりと
覺おぼししく。肌かわの異こと様さまさるる腹はら巻まくくして。白羽しろはの征矢せいや幾いく條じょうと肩かたひひ手ては半はんららと携たづね
るる人ひとのの蓑すゐててふふものものと着きるる。頗すなはちち戎じゆう伎ぎ堂どう々々々々一個いっごうの英雄えいゆう禹う歩ふ進しんま
りりて。ままづ安良あきらが奴やつ骸がいかいと足あしももて轉まぐぐおおかかく海うみは押おし流ながしし夷守いしやうが傍そば小
よりよりて。衣ころもと引裂ひきちぎ其その瘡かさ口くちと楚そと結むすびび又また懷中なつかのちゆうよりより仙丹せんたんと拿とりりて口くちは會あひ
やよ婦人かみ心こころとたたりりふふののちちねねううと呼よび生いららししめめ夷守いしやうは彼英雄かのえいゆうは打うち向むかひひて。
そも君きみの何なにぞの好このあありりてて。吾われ們ら母子ぼしと斯かくすすでで憐あはれれまませせるるややんんいと覺おぼ

束たままひひへへとと関せきて英雄えいゆう打うち頭あたま絆ひの仔細しさいと生いままはは左ひだりののひひままも
道理道理とと原もと我われはは此こゝ日本にっぽんの人ひとふふああららば新羅しんら国こくの遺民いじんややと姓せいと陳ちんと
倫りんと喚わぶぶ者ものささるる。倭やまとふふももや四年しにん以前いぜん我われ唯ただ獨ひとりりり此こゝ日本にっぽんへ来きりりしし深
縁とよ故こありりて。一朝いつしやう一夕いついつふふ尽つくくががらら。我われ獨ひとりりり彼かの處ところの芦間あしまふふ船ふねとよよせせて
你おんが此こゝ處ところは呻吟しんいん来きて獨言ひとりごちしし始はじりり。檜隈ひのき安良あきらと戦たたかひひく深ふか瘡かさと
肩かたよりより終つひりりままてても竊ひそかかにに窺うかがひひししるるががらら。阿誤あごの事こと太刀たちのの絆ひ荒あら
ははらら推おしししるる。ささららにに疾はや出いでで安良あきらと撃うちち。你おん們ら親おや子こを救すくへへばば願ねがひひししるる
不仁ふじんふふ似にててもも我われののよよりりととよりより大望たいぼうありりしし。愁うれひひをを仕し出いししるる毛け
と吹ふ疵きずととののととひひららと。唯ただ幾いくととびびひひくく拳こぶしと握にぎりり唾つばと吞のみみて。芦あしのの残のこりり
みかみかくくららひひつつ絆ひののちちをを余あま所ところはは足あららずず。ああららずず烈女れつにょと撃うちちせせるる。今いま更さらにに臆おそれれと
嘯せうふふせんせん。我われ身みの上うへにに推おしくく措おきつつ你おんのの名な高たかれ熊くま勢せいが妻めかけああららずず。其その児こへへ你おんが
子こららるるよよううのの疾はや志しああららずず。且かつ彼かの羽は白しろの熊くま驚おどかかすす。元もと新羅しんら人ひとの未まだだののししるる。

申口 三十一 三十一

側の小室へ誘ひつゝ互に積る物語。さうもは後と結ひつゝ。彼翠燕女小日
未心とつけける同僚なる呂女道とつゝ者小見をらね郎會の返と織世
科急地互に園園を撃つと悔ひ小甲斐多身の過ち所往亡身とあましむ
一夕園園司我と園園より出でてつゝ汝へ既小刑伐のあへき身をも
帝竊小汝を命じつゝ一大事ある命へ助けたりと此方へあよとつゝ
おろく帝の前小連行が我の其時より心地ゆく龍顔と拜するより低
頭平仰して蹲踞つゝ帝我と王坐近く召せられ声とひく直つゝ汝へ父
祖もまはせらる。其志しまらゆりして能文武の才小秀るものなれば朕も
ひひてより重く用ひんとあひしうと未と羊の若きよりて余人の嫁入を思と
折もさうとあひしうと若氣の事とあひしうと翠燕と結らひしうと
是大の事過ぎる。さの強て咎むべき事小ありと何卒其罪を免さんと
あへども公道小親疎さすば私小ゆるがごとく今日は園園を撃つと素

より汝みへ朕竊命じつゝ一大事ある命今より其罪とあつとぞりし
且翠燕の女のこととすば二三日以前は其罪とゆる。親師へ送る遣
とすば翠燕が身よつけ。意と悩とてさうとつと懇言宜つとぞ我の
唯聖恩の承きを拜謝し。とやから責さくとも四方に使して君命と耻
しめらる。と士とつととあを承つと然る今国禁の大罪を犯し。既園園
小驚し身の斯命と助け一大事を命じらんと。ねつゝ稀る幸ひ
たと粉骨碎身してつゝもひんは奈何の事や。と詔りあへばと。あひ
あんでつゝつゝ帝龍顔うつゝ。朕もつゝ汝が其あやさるを
知とば此一大事を命ずるも其美と謂者余カテも。朕年未東方の休國
と攻討人とあふ志ありとつゝ。彼國の中華の人す君子國も稀す知ふ
して粟散辺土とつゝも上下と和。君臣父子の礼讓厚く。且勇猛絶倫
みして殆ど當りげに加之天神地祖の庇護あつと。やもすれば神風吹起り

船と覆とと數々あり。と関ヶ原未意よふのふていづづふ月日とすと
せり。されば汝竊は彼国はありと。倭人ふ紛きて其剛應となり来る
べ。あは極めくす難きことと。汝は我國の爲に千里の外に赴いて此大
事と勤むべき。宣ふ言兼て我謹んで奉る。臣原未蘭相如男
き。蕪茶張儀が辨すといふ。一人倭國を渡り。此と必と爲謀せんとす。
尙仕損じも其罪と。此此ひつひ引うけ。其処は命と捨ん。何より以ていと
易う。聖慮安くあり。言左右を俟てある。と関を奉り。其時帝
の斜めらば。飲むをひらぐ。竊は乗舟す。倭國へしてわ渡り。動静も
らひひまらる。黄金多く賜う。夫より我の姿を窺ひ。舟に乗じて此
土へ渡り。金銀を以て直地は倭人よ文と結び。つらふ今豊前の國はよ。倭女
とあり。妻とせり。斯く此頃筑紫の方穏らる。と関。活業の爲と偽りて
此海辺へと棹と。東方西方と漂ふ中。小熊鷲といふ者致さく。官軍

討手に向ひ。とある。是は究竟の時と。兩虎争ふ其虚ふ。来り。日本の望と
達せんと。今日も此処より出来り。阿誤が命と助る。将き遇ふいふ。時
又父の七規の導きあり。何はも。其阿誤は此陳倫が預り。必
必はあ介。我隱を家へ伴ひ。東も西り。守立人諱々い。と
々。其深瘼あ。百の扁鵲有と。今。露の玉の緒を。懸人術あ。
が。あ。烈女と此濱辺の真砂は。骸と埋ま。嗚呼。天を。新羅の忠
か。悲歎の涙。と。今。夷守。嬉。氣。君。新羅の忠
臣。始。推。新羅の人。知ら
ざり。君。此子。此。太刀。逆。身。荒。破。朽。何
より。骸。其。巨。東。の。肥。入。争。ひ。人。陳。倫。何。例
卒。此。子。成。長。バ。子。も。文。字。武。術。何。と。教。え。て
父母。名。を。揚。して。此。世。の。名。残。今。一。目。阿。誤。が。顔。と。と。苦。痛

申力三三草圖

小心引つきて眼入見へぬぞ悲々々々つらつら懐ゆる阿誤と申して陳倫よりつゞき抱きしる親子一世の別れぞと感通してふもろは色閉よりも夷守の倭僮さく探りしる我子は舞いまがりつれ又も決ま流しう早引渡玉の緒も切くもろろ息しぬ

陳倫乗舟舟危急

此時陳倫目とあざり鳴呼実や三子息あま千般用ひ一旦息くも百事休むと暫時歎くともろろ歎き小時とつらつら敵の為は怪しむら多勢以て圍むる我は三頭六臂ありし心奈何はまろろ阿誤諸共一擲とあるろ。さへ夷守が七骸と此は馬蹄はけ人も本意ありせめて千尋の此海へと夷守が成骸小舟とつけて海へまろろと沉る折々。忽地あるこの茂林の裡より鯨波とものろろ一隊の軍勢頭とろろ陳倫ハ斯とろろ(つらつら)慌忙しく彼方へむけく太人とするふ真先は進もう大將大目揚て熊鷹の

全類逃るとも逃さざる還せ戻せと呼らつ。ろろ小箭つひて丙と射る其強き小身とひらけ袖とろろつて箭ハ虚しく向ふ松の幹ふより。あハ射損せしこの箭とつらんとする其ひま陳倫持らるろろ箭つひ後ある小射返さ箭ハ彼大將の鎧の射向小誤矢とまろ何ろろなる今大地撞とけろろ左右は這ふ人々の駭きまろろつて介抱する間小陳倫ハろろ渚は走りつれ繋ぎあつらる船小地乗り纜解て海原へも艦出ま折りつれ陸の潮の涌が如く數十艘の早船と海浮り追かくまで唯渺々たる大海小一葉とろろつて柳さ小舟霧の籬小隔らる者を見えずろろ編者山月つれ此巻の幾條ハ唯其景様と主として記せば頗る院本小類て所傳傳記するもの文意あろろ。さほどあハ見女子の目と飲ばる人馬さる者幸ふ其罪とゆるる

仲哀帝於檀日吉崩御



て告つげさせしむる。されば世よふ神主かみの事こと。是亦これまたあふ始はじめはしりし事こと。
 借かかも皇后こうご右みぎの如ごとく神主かみとありし事こと。謹つつしんび宣のたまふ事こと。先まづの日ひふ
 小我こが愛あいの中なか小頭こがしらとほせし神祇かみハ奈何いかんなる神祇かみとほせし事こと。名なと
 知しりし欲ほむ事こと。且かつ又また天皇てんかうの告つげ小順こじゆんひらきし事こと。神祇かみもつせし事こと。
 か。欽上きんじやう再拜さいはい々々々々。と七日七夜しちにちしちやが其間そのま祈いのり奉まからせし事こと。乃すなはち神祇かみ
 皇后こうごの尊體そんたいふりて曰いく。我われハ是神風伊勢かみかぜいせの国くに百傳度逢縣ひやくでんぶあがたなる折鈴せしず
 五十鈴いすずの宮みや居ゐる神かみとて名なハ撞賢木つこうぎ嚴げんの御み魂たま天疎てんそ向津むかひ媛命ひめのみことと曰いく。
 是則これすなはち伊勢いせ。此時このとき鳥賊津連とりぞくつづら此神このかみと除のぞけ外ほかもいふ事こと。問とふ又また答こたへ曰いく。
 我われハ是幡菽穗はたかすほふ出いで尾田おしだの吾田ごたの淡あの郡ぐん居ゐる神かみ也なりと曰いく。
 神かみ又また連問つづら今度このときハ於天事代あまことしろ於虚事代うつろことしろ玉たま籬さか入彦いりひこの神かみと曰いく。
 又また連問つづら今度このときハ日向国ひむかの橘たちばなの小門こまの水底みづそこ水みづ
 兼稚かねわかの出居神いであきのかみ名なハ表筒男うへつつら中筒男なかつつつら底筒男そこつつらの三神みつかみなり。と曰いく。
 是則これすなはち吉よ明あき。

神かみ此後このち鳥賊津連とりぞくつづら問奉とらふ事こと也なり。此四柱このよつばしらの神祇かみの外ほか更さらも告つげりし神かみあり
 されば連つづらが問とまはれし事こと。時ときハ皇后こうごハ御身みみの中なか汗あせみみして在ありし
 ころ首尾くびおしよく神主かみの役やくと勤こまめし言ことと出いで尊たうき神かみの四
 柱しちうの告つげとひききし感かんじあり。斯このときハ皇后こうごハ右みぎのどく先まづの告つげと蒙かかり
 神かみのな名なは知しりし事こと。新羅しんらと伐きんとあし先まづ能よ敷せ
 襲おそへハ不意ふいに責せまらざる事こと。吉備きくひの鴨別連かひわかづら一ひと千せん余よ騎きと後のち日向ひむかの
 国くにへひけ鎮しづめし事こと。遣つはされし事こと。此戦このいくさハ一條いっじやうの弟あに五ご
 皇后こうご於玉島川たましまがわ釣香奩つこうげん。
 其後そのち皇后こうごハ神慮かみに任まかせし事こと。新羅しんらと征せいし事こと。軍勢ぐんせいと集あまる事こと。其門そのかど
 とむく火前ひぜんの国くにへし玉島たましまの里さとと過すりし事こと。一流いっりゆうの小川こがわありて水みづと
 清きし。皇后こうごハ水みづとつりし事こと。其見そのみありし事こと。先まづ示しめし事こと。朕わが此川このがわにて占うらんぜし
 と宣のたまふし一頭いっとうの針はりと持もちて釣つりし事こと。糧たうを取とりて之これと餅もちとほ裳ももの糸いと

なるくとも不しく。眼中鮮明く骨違しく。天晴丈夫の骨柄るは。其
 術も世子勝也。奇功ありん。其時武内大臣年磨は。向ひ天皇此度
 か。神祇の告ふ。遠く西と征。多分。俄多。の艦
 艘と造ら。汝と招き。數百艘の軍船と造り
 出。否や。年磨。階下。平伏。臣が拙き術。遠く雲井。閑へて
 賢。詔と蒙。我術の譽。此上。知ら。我家。代々。船と
 造。活業。近曾。多。行。今。三百。人。及
 及。其。造。得。併。帆柱と
 大。良材。數。時。難。臣。案。臣。國。船木
 山。良材。多。御免。蒙。木。樵。人。多。彼。山。下。け
 つ。良材。多。伐。出。亦。後。海濱。於。廣。多。木。屋。と。夜。日
 不。日。造。事。武。内。大。臣。深。歡。い。

疾く船木山の樹木と伐取つ。則ち此方より介九と
 して。其監司。年磨。面。目。と。施。本。國。立。歸。り。

安部のナリ。安部。九。遇。靈。魂。知。室。劍。在。知。
 斯。年。磨。勅。命。の。趣。き。と。近。國。觸。り。刻。符。と。樵。者。社。人。と。多
 く。集。め。船。木。山。は。八。日。と。經。て。數。株。の。巨。木。と。伐。り。溪。川。に。流。し。備
 其。身。ハ。又。弟。子。三。百。余。人。の。船。匠。們。と。共。に。海。濱。に。あ。り。て。手。斧。始。と。す。是
 船。木。山。に。良。材。と。伐。出。り。て。荒。蕪。に。け。奏。聞。す。り。わ。ど。ふ
 や。其。内。下。知。り。て。安。部。介。九。ハ。豊。前。へ。來。り。年。磨。が。家。に。在。て。日。毎。海
 邊。の。木。屋。に。赴。き。是。と。促。さ。り。原。より。多。くの。軍。船。と。造。り。出。は。と。さ
 る。頃。は。造。り。果。す。も。あ。ら。不。彼。年。磨。が。女。子。割。織。ハ。今。茲。と。二
 び。鄙。の。美。兼。る。生。ま。る。里。の。壯。伎。們。の。渠。心。と。は。



絶書目を贈者多きほど。割織へる浮る方ふ心とらん唯猶父年磨景
 考と尽し且比呂飛丸と憐む実の茅のてく抱きうへく愛いつし
 ぬ備も又年磨ふ介九が己が家来りしより離亭ふ居りや女子割織をのく
 朝夕の給仕とささる程に割織も又父の言つけるま介九と敬うて大の
 ちくばいとはちやうふ仕へる頃しも秋の半やて秋雨蕭々と物まびり
 一夜介九の燈の下ふありて只一人あり方行をのてこひ居るふ不測や風も吹き
 ふ燈火消んとて又明くさり推して又又音くさるふいづかすつ彼方ぞ
 見らるが四十さうとさや色青ざるる男黙然とて坐しつる介九の眼
 とさめてつり其形勢とさる何とやん此世の人も又さる小備へ彼奴鬼態
 山魃ふあふん狐狸の類ひやして我心の鬱々たる虚はつけなごうさ人と
 するさうれと早くも推し傍る劔とさる侍と正視汝何等の者ぞ何處
 ようら来りこぞと言兼激しく答むふ彼男愁然とて涙を流し唯一言の言

もさくして何やん神代文字の書ものごとく出せり。介九あまんと手ふさ
 て。直地小漬てんさうさうさう

屍埋樹下 劔匿牆中 間道勿追 當害其躬

と記さう介九の一切その句意と解さるる再び問あはるんとすさう其
 主へ旭は霜の消るごとく。姿は見えむさうさう。介九はつりさひさうさ
 彼靈魂の相形何とやん見識さうさうさひさうさ東方西方考うさ此家の
 女子割織顔小髻髻さうさうさうさ介九再びさうさ。倘や今の靈魂は此
 家の前の主人さう。故の年磨ふあらん乎。さあらんか割織が実のさうさ
 其面うげの肖さう人事もあらん。日外須栗が物治とてさひ合まさる今
 年磨うて故の年磨が妻と通じ。竊は渠と殺害す。庭の木立の下さう
 埋ちさうさあさうさうさう夫はそれさうさうさう第二回目とて考さう定
 りて此家の牆中小劔の度さうさうさう。さあは果して我推慮のさうさう

今の年磨ふの関。白地六注美多と。まだ明日割織が来らん。此渠成
まうして尋ね問の事大う。夫分明うんと。一人心ふう。つとつ其夜の
そのまゝ。卧ころぬ。

割織中毒酒。非命

斯て其次の日も雨降づく。ふ割織の朝飯と。りて来り。介九へ。さむる。介九
の割織。ふ打向ひ。你の今の年磨が。子ふあ。うらうら。粗問知り。が。実の父手
磨の何歳。少く身は。又奈何。する相親。さうや。め。うら。ね。と問ひ。うら。割
織。へ。つ。心。得。め。此。面。色。で。あ。ん。ぢ。ひ。も。よ。う。ぬ。と問せ。ふ。め。の。う。を。妻。が
実の父。う。へ。五年。あ。ら。ん。四十。あ。ま。う。二。して。世。と。辞。し。ま。ひ。い。ら。ひ。が。の。相。親。の。妻。
ふ。肖。う。と。人。々。平。素。ま。の。や。ま。と。答。え。て。い。へ。介。九。に。再。び。割。織。を。打。む。う。い
あ。う。が。が。実。の。父。此。世。も。な。り。其。中。小。太。刀。と。好。ま。て。秘。藏。に。せ。ざ。う。う。や。と
い。ふ。割。織。又。答。え。て。否。め。は。活。業。ふ。い。へ。太。刀。を。い。の。の。手。ふ。ふ。う。と。

も。う。と。つ。介。九。の。案。して。偕。我。推。慮。と。違。ふ。と。唯。余。所。て。ふ。紛。ら。し。う。
何。気。る。以。味。あ。く。朝。飯。食。あ。う。猶。左。往。右。往。い。ぢ。う。う。して。う。う。ん。処。へ。王。人。の
年。磨。鉋。子。杯。携。へ。来。り。斯。日。と。母。ふ。雨。う。う。づ。り。て。さ。ま。を。徒。然。ふ。あ。う。す。ん。き。ふ
何。ら。く。も。酒。ひ。つ。あ。ぐ。せ。て。憂。と。さ。う。と。せ。い。う。や。よ。女。子。あ。る。来。り。の
酔。つ。ふ。ま。う。う。刀。祢。の。心。を。慰。め。は。い。う。べ。と。い。ひ。了。り。て。母。屋。の。方。へ。と。去
ぬ。介。九。の。昨。夜。の。霊。魂。小。心。中。甚。と。易。う。と。ど。一。切。酒。も。飲。と。と。せ。り。唯。手。と。拱
き。物。業。に。顔。さ。う。に。割。織。の。介。九。が。側。近。く。進。み。刀。祢。と。物。を。い。け。何。と。さ
案。に。煩。ひ。あ。や。今。又。う。り。て。来。り。し。酒。の。濁。酒。を。叩。口。の。是。あ。ま。う。と。な。れ。ど
一。あ。ぐ。せ。し。て。旅。の。憂。と。さ。う。と。せ。い。う。と。い。つ。顔。を。赤。う。て。声。を。い。く。め
て。告。う。小。妻。と。耻。し。て。さ。う。竊。に。刀。祢。頼。り。や。と。い。て。あ。ま。う。と。賤。し。身
と。ん。顧。ま。て。今。日。は。ど。う。慎。や。う。妻。と。い。れ。賤。し。者。の。縁。を。も。つ。う。と。と。と。問
入。ら。し。て。も。う。と。な。れ。や。と。や。と。と。な。れ。介。九。ハ。漸。く。割。織。が。方。と。顧。み。你。ハ。常。より

我子仕るこいとまやうもどか願ひとあり何夏ふまね聞ぞけ得る子ぶふ
 疾治るべしとありさるふ割織の顔打赤めて長き杖と面度ひ雲時
 のよひさるるがやあつてつやうの妻が口よりいふさうとありし
 とさう君此家へ来るひ初より不図に深まりて及びぬとありし
 るも尤も右も右の暗く晴やも朝夕は仕まる度事ハ目をして意
 と通じとふと君のつも余所ぞ知らず顔して居る程ひひとさる
 かくさうつも唯刀祢のとさる妻の心と憐れむひて側室とさるさる
 此上の嬉しむあつてとつ介九が膝元小倚と取て突退つ心の
 中ふさう此末通女ハ父年磨よも勝つてはあつる者ことありし
 豈計らんやう我は心あつて管待熊の等閑さるがさるつと賤し
 女の口よりして浩くことと我を告ぐ実々礼をいさるるとてあつて
 いさる此割織のよふ十二の顔色といふあつて今茲二八ふと

初花の綻びからんとする風情ありあつて山ハ聖も迷ふとやん殊更此小室
 は是母屋小離さるる処やて四下小人とありあつて介九色好さる者さる
 せば此末通女が絶言と聞て忽地魂と天外に飛つて了る乱離の人とさる人ハ
 介九ハ青年とさる篤行の人さるあつて及て其無礼と心中怒つていふさ
 らぬ体やうさる夫婦ハ人の大倫やて三朝五帝も是よりさるさる
 実の夫婦さるるも唯你と我とのかたひよりさるさるさるさるさる
 我此家ハあるこれ私の事さるるいと大切なる監司さる其役目と余所
 てか浮るることをかへさるべきや役目と首尾と勤め終り筑紫に帰らば
 尤も右も右が心はさるるさるさるさるさるさるさるさるさるさる
 夫ハ偽さる君ハ定やく故郷さるさるさるさるさるさるさるさるさる
 妻を嫌ひさるるさる壁賤し者さるる女の一念あるさるさるさるさる
 蛇ともうてさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさるさる

凍ゆめのとあへども。妾がてれが凍ゆめも。あつく心を翻へし善ふ帰すべき年磨
 ろふ。大妻と関し者まうと。及つて妾を殺すべし。迎も返すべし。命まう。君の
 此手よからむ。と心ハ極めまふ。まが女の心弱く。兎角涙のあかしくと
 紛らると飲る酒ハ父がまはし。毒酒をて。あは君の命ハかゝるとい
 ハ願ふも。又身ハ幸ふはし。君ハ早くも。此処と道ハ荒紫へ歸り。天皇へ此赴
 きと奏聞して。年磨が素姓を死し。まへ。介丸感激す。你のま。年
 若きふ似もまは。其性質冷憫世。あは。う。ま。未通女。世ハ色ハ弱
 情ハ多。淫奔野合の夫。ま。義理ハ。ハ。婦女子等ハ。郎人。と。ひ
 骨肉の親兄弟の言葉。あ。つ。或ハ財宝を得。あ。小夜衣の夫と重林艶
 言。りて。仇。と。ま。是。ま。貞女節婦。と。ハ。時ハ。偷客攫徒。と。ハ。も。
 武士の平素とせ。あ。は。それ。ハ。事。あ。は。你。原。来。介。丸。ハ。情。意。あ。く。唯。天。恩
 の。忝。き。と。い。ひ。其。心。を。殺。して。年。磨。が。邪。と。い。ふ。噫。烈。女。と。い。ふ。べ。ん。実。ハ。我

昨夜あつくの妻あつて。つり。事の意を案ず。不彼。其。規。ハ。你。が。父。あ。して。今。の。年
 磨。ハ。你。が。母。故。の。年。磨。が。妻。と。交。通。す。ま。ま。に。ま。り。て。故。の。年。磨。と。殺。し。本。の。下。を。ま
 不亡骸を埋め。のの。あ。あ。ま。ら。高。極。め。我。推。慮。不。違。が。你。が。為。ま。今。の。年
 磨。ハ。実。の。父。の。仇。と。ま。い。ハ。ま。と。い。ハ。名。あ。つ。て。浮。く。ま。ま。り。て。恩。我。あ。ま。は。你。が。手
 より。ハ。付。じ。幸。ひ。ま。う。我。你。が。口。より。年。磨。が。隠。謀。露。頭。して。不。亡。ら。う。ま。い。ま。り。時
 ハ。自。ら。仇。を。討。ま。と。い。ハ。と。仇。を。討。ま。は。是。は。ひ。く。天。一。孝。子。の。口。を。借。て。案。を。悪。事
 を。生。ら。う。何。あ。も。せ。よ。此。庭。前。の。塙。の。下。を。探。り。ま。は。或。骸。骨。二。三。ま。り。分。明。ア
 て。疑。念。も。ま。ま。い。ま。い。と。ま。り。と。刀。を。引。提。立。あ。ま。り。と。す。お。か。ま。疾。り。窺。ふ。下
 郎。其。庭。の。木。蔭。と。躍。出。我。等。主。従。の。隠。謀。を。悟。り。知。つ。る。安。部。介。丸。生。て。ら。は。は
 と。捧。ら。う。の。唯。一。撃。と。う。ち。か。く。と。介。丸。心。得。身。を。か。く。邪。魔。を。ま。ま。と。刀。を
 抜。ま。が。ハ。い。ま。ま。戦。い。ぬ

武内射陣倫報主仇

介九すけくさ下郎げらう算あはだと戦たたかふうち其その太刀たち音ねの母屋ははやへ関かり年磨としがらが来きらば面おもて倒たふることと
忽たちまち地ち大おほ偈い一声いっせいして下郎げらうと両段りやうだんは斬きれも鮮血せんけつ颯さつと通り傍かたはらの堀根ほりねへかゝると
いと〜〜天地てんち微傾みかたむ不動ふどう揺ゆりて明光めいこうなる光ひかりを放はなし穢けと拂はらふ形勢かたち介九すけくさ結むす
と眼まなこをど〜も儲たくわへて我思わがしふ違ちがひ此この堀ほりの下したに宝たから劍けんを度くらしありぬ〜見みたり
と持もちたる太刀たちも〜堀ほり竹たけと手て早く斬きて掛かけし〜案あ違ちがひ一口ひとくちの劍けん光ひかりを放はなつ
て出いで〜介九すけくさ直地ちかぢふと〜上あぐ〜と見みたり此この劍けんの形勢かたちは是こゝ日本にっぽんのどのふ
あ〜ず何なにふもせよ彼奴あいつ曲者まがもの子こ極ごくつ〜と母屋ははやの方かたへ行人いんじんとすふ年磨としがらの物音ものねふ
駭おどろき走り来きり斯しかと刃やいばを〜飛とび〜劍けんを奪うばひ〜人ひととる〜介九すけくさ早くも
弓手ゆみで持もち久くわ奈何なにかふ年磨としがら汝舟底にせうていへ兎うとあけぬ日本にっぽん勢せいと海底かいていへ溺なると〜せん
するの〜酒さけの中なかへと毒どくと和なれ我われと害がいせん〜と心こゝろ根ね汝川にせがわ上かみ梟師せうしが余類あま類を〜す
是こゝ熊鷹くまたけが殘黨ざんたうを〜人ひと疾はや実名じつなと打うち〜傳つたへを受うけと呼よび〜年磨としがら唯一
言ことの間答まことも及および及および白刃はくへんと振ふる〜斬きて〜介九すけくさは是こゝと〜受うけと〜

い〜と戦たたかひ〜年磨としがらハ透とほと〜介九すけくさの肋わきと一當ひとあめて尻居しんいふ〜其その
ひ〜持もちたる劍けんと奪うばひ〜行人いんじんとすふ〜奈何なにかふ何処どこより〜前まへ一筋ひとすぢ飛と
来きり年磨としがら右みぎの腕うで小立こたてと〜捨すて敦圍とんゐあり〜何者なにものを〜比ひ真まと
我われと遠矢とほや射やり〜と四下よつたと信しんと白眼はくがんつ〜武内大臣たけうちだいじん
日月にちげつと画えき〜軍扇ぐんせんと〜依然いぜん〜と出で来きり小河こがの年磨としがら実じつの名なハ新羅しんらの
陳倫ちんりん〜と〜年磨としがらと〜打うち〜齒はと〜大おほい〜怒いかり
よ〜朽惜くしやくや殘念ざんねんや今いま何なにか〜むべき奈何なにかも汝等にせらが推慮おしり違ちがひ小河こがの年
磨としがらハ假かりの名な実じつハ新羅しんらの忠臣ちゆうしん陳倫ちんりんと〜我事わがことを〜我新羅王わがしんらおうの命いのち〜
五歳ごさい前まへ此土こゝ〜と〜あ〜と〜不圖ふと此家このやの妻つまと密ひそ通とり〜前
の年磨としがらと〜人ひと知しる〜益えきを殺ころす〜あ〜の小川こがわに身みを投なげ〜と御人ごにん等らと欺あざむ
せ其後そのち此家このやの入婿いりむこと〜名なも其後そのち年磨としがらと更あらめ時節ときせふと窺うかがふ其そのうち年
の秋筑紫あきつし小吏せうし〜能よく〜と問とふ〜竊ひそか〜彼處あひこへ赴おもむき〜不意ふいに能よく〜妻

夷守との者ふらぐりあひ此出石の太刀と集が子熊阿誤と附属せられ船小
 乗らんとする折かり頻り小我と追者ありせんもさすて箭を放ち先は進
 る大將と射て落し其ひまた船は打棄り国小歸りて彼阿誤は捨子と拾
 ひいと人よ傷り飛呂比丸と名を付て我子とすして養ふる斯はごころ
 我大望と刀頭いさむるを残念とさふの我味方の者より外は我と新羅
 の陳倫と識者され小奈何して武内宿祢あること知くころやと浩と武内亮
 尔と打笑し思うや夷賊かほるもあらんやと素より安部高九同く介丸
 と心と合し介丸此国へ参りしのち我もつらき罷り。竊ふ人のて容子
 を窺ひ高九ふひ付て汝が一味の者共と西三人いはれりて鞫問せし苦
 痛不堪と二伍一什と白状せり。あはれあはれ始め汝が素姓を知り且天皇の
 仇とると知まば主君の仇と報おる矢の根もさかむるが覚悟とせよと問う
 陳倫冷笑し斯る上六枚物狂ひ心得よやといひさるふ刀と直向ふかぐ奥より

けけの。比呂飛丸と号する阿誤と小胆ふころとて忽地庭小躍出さる。介丸は
 斬く心つれ此体とらるるあはれとて。士卒と下知す。四方よりあつらふ
 撃取んとせしやふ。陳倫は少くも騒がばと。雄手小阿誤と抱へ雌手小白
 又と打さる。近づく者と二三入右と左へ斬仆し。少の透とらめらて
 準備をほおれらる。空井のちこ飛入る。斯と見らる。武内大臣あり残
 念や曲者と取逃せしぞ口惜き。ついで空井へ飛入て早く彼奴と撃取と。
 下知と傳ふと介丸は急ふとあつらふ。此空井戸の裏より船木山へと
 通洛さる。間道ありと覚て。窮嵐かつて猫を食ふ。ついで入る過ちあり。
 我昨夜あつての事ありて。四句の文と心得る。其第三四の句ふつと
 間道追と勿と。當ふ其躬と喜す。とそれ一旦あつて道。船木山と取
 圍む。道とするは籠の鳥。了ふ自と驚す。と言葉せし物津の
 武内大臣は大小奇異と嘆す。一旦此場と道と。皆武内へ割織り外を憐



鵬阿誤
斂烟
空中へ

熊就鳥君

比呂丸

申刀屋三郎目入



陣倫孤兒
韓土へ送らん
祈念して
自害を

陣倫

木下皇月三郎目入

介丸すけいまる下知したちて其亡骸そのなきがらと取とりて直地なちち小軍勢せうぐんせいと送おくへ舟木山ふねぎやまへ向むかへ

鵬たか送孤兒こご於韓土かんど

陳倫ちんりんのひて船木山ふねぎやまより良材りやうざいと伐出きりだすてよせて彼辺かたへの山陰やまかげに一箇いっかんの岩窟がんくつと斬きひて此処こゝより我家わがやの庭前にわまへへ間道まみちと造つくりおぼゆるるるる今いま此厄急このやくいそくの場ばも望のぞみぬ熊阿誤くまあまと携たづへ出石いだしの劔けんと佩ひて船木山ふねぎやままで落おち来きるといへども早官軍山はやぐんやまの四面しよめんとわら取巻とれまき金鼓きんこと鳴なりし攻登せめがふとすがの陳倫ちんりん今いま暴あまると覚悟かくごと極まめ熊阿誤くまあまとある岩いわの上うへに打うちたて諸もろも君きみの運拙うんせつはゆまにる未いまだ襪裾わくすその裡うちより親達おやたち不別ふべつまるひ夫おとこより我手わがてへ来きらせて今日けふはゆでへ過あらひいへ今いま斯多羊すたやうの大望たいぼう願ねがはるるへ連つも君きみと俱いははるる波濤はたうとあまき故御こごの新羅しんらへ歸かへらんすもす我身わがみハ此土このちに朽果くくわも魂魄こんぱく君きみと守まも護ごりて此太刀このたちもつるも故御こごへ送おくり歸かへりておぐべきと衣えの袖そでと引裂ひきちぎて右みぎの小指こさきと啗切くわんせきの一伍いぶ一什いっしと書記しきし太刀たちもつるも熊阿誤くまあまが帯おび小楚せうそと括くわつ付け

欽上きんじやう我國わがくにの祖檀君そだんきみの神かみ且かつ父ちち熊鸞くまらん母はは上夷守じやういしゆの魂魄こんぱく力ちからとて今いま幼君わうきみと故御こごへむけ送おくりるる我われ今いまあらはれ自尺みぢて此御このごと則すなはち誓ちかせんと天地てんちと拜まがり刀やいばと技わざ左ひだりの肋骨りぼつの間まへ突つ立て右手みぎての方かたへと引ひはり臍膈せいはくと相あんで空中くわうちゆうへ投なりて尺ぢもぐ不測ふそくを一陳いっぢんの暴風ぼうふう颯さつと落おちり来きるとつとて恐おそろく死し一羽いっふの鵬たか翼よくと鳴なりて飛と下くだり岩いわの上うへより熊阿誤くまあまと出石いだし劔けんとあつて只ただ一廻いっかいもふかひささひ虚空こくうはるかかまひ上あり西北せいぱくの方かたへ飛去とひり陳倫ちんりん見るよう大おほく歡よろこび西北せいぱくの方かたへ則すなはち故国ここく偕ともに熊鸞くまらん君きみの夫婦ふうふが魂魄こんぱく今いま鵬たかと化かり来きりて児こと守護しゆごし故御こごの新羅しんらへ連行つれゆきのありあは婦めと黍あはけるやと刀やいばとあまも取直とれなおし頂かぶへけて我われと吾首わがくびと前まへへと劍斬けんざんし鳥とり深ふかく自みづかり首刻くびごし楚王そわうが最期さいきの形勢かたじも斯かやとるる勇ゆうもあは去程きよぢ不安ふあん部ぶ高丸たかまる介丸すけいまるの先鋒せんぽうふ打うちすも岩窟がんくつ近く攻寄せめよるる早陳倫はやちんりんハ自害じがいすも首くびさ前まへへ落おちりるといへ猶なほ兩眼りやうがんと見みひりて生なま如ごとき形相かたじも容易やすかり

傍へ近よす。或もて數回突貫き入て漸く其眼を閉る。及んで則ち之
とより上り拵く。陳倫の屬下にも魁首の仇を報せんと。彼岩窟の裡より
して。二三百人の賊徒一同小刀と接つて撃て出さる。高丸介兄弟と暫
時の間小撃てり。陳倫が同類一人も残さず亡くさる。彼出石の劔と能阿
俱が刃をふる。搜しゆむらとりども。了ふ其ゆへに知れざる。せんかこりく
て此由と武内へともやうふる。武内へともまづ天皇の仇とる。陳倫と撃取
り。や阿俱と撃ちゆ。劔のゆへにんぞとも奈何かどのことあらんと。
かくて軍とはもつ。凱歌と唱えて筑紫さる。檀日の宮に立歸さる。借此
赴と皇后へむけ奏しる。皇后一さきあしや。不意も天皇の仇の亡く
と歎ひあひ。且又其奇異と嘆じあひ。武内始め安部兄弟が功と賞せられ
恩賞厚くあらう。斯て皇后は新羅の征伐の軍勢あひく諸国
より集まらる。年磨石のてくさる。船艦の用意調ひかたれ夏ゆふ。

再び諸国へ詔と下し。船艦と集めらる。累船艦も調ひさる。い
新羅と証し多し。其れ用意ぞ専らる。儲も又皇后は頃諸軍の心とを
うらむ。新羅の国は陳倫の故国といひさる。渠奈何さる傷うとゆ
せ。そのふもあはれ。さるばる有無と定めぬ。唯皇后への夏の告の
る。其れ実ふかは国ありといふも。竟末さると誰いふとさる。いひ出
軍勢何とさる。急うかちふらる。皇后大いふ心と痛めさせられ。朕ハ
素より神祇のいと著明の告あり。其れ神祇の名とさる。得々聞し
一点も疑ふてあら。諸軍あまを猶うさる。疑ふ時ハ急う生れ急り
生ずる時ハ勝利の端さる。されば此入人として。新羅の国と目のあ
見届け。諸軍の勢とて疑ふ所さる。しめん。海人の烏摩呂といふ
ものと皇后召さる。汝今より西の海に出で国ありや。人定め奏して。宣ふ
ど。烏摩呂の畏らけさる。か。西の海に出で国ありや。人定め。此日折も

雲霧あつてまうとい夫とも見定めぬ。鳥摩呂立帰して皇后(国)の心もと
勅答るるあど皇后更み愁ひのまらるる軍勢のあつるの本あり。朕
諸軍勢の疑いとゞらるるや。国とんぞしてせん其のころ。及つく疑いと
増への必定する。あは此休ふくかまど。と亦其望の目。磯鹿の海人名草と
りくると召て西海ふ出て国ありや。見定るべし。と宣ふ名草はかき西の
海へはるる。七日七夜と経て立帰る来つ。楮奏してのまらる。我日本の
西北ふあつ。昂して二国ありて。僕目のあつる見来り。と奏聞する。皇后の
始りての心と安んじ。諸軍勢へも名草より。国あることと聞すれば。諸軍勢
あまらる疑いと散じ。怠り心更ふ。かして又外に諸国の軍勢もあひく集めて
既ぬ軍勢四十二万余とあり。れが皇后大に歡び。武内ととも計ごと
後兵と練り。軍事甚と厳き。時皇后群臣へむけ宣ふ。夫師と
興し衆と動さ。あつるは國家の大事あり。安危成敗斯不在。今神祇

の生不従ふ。新羅と征伐せん。と云ふ惣大将の役と。群臣の中ふ命あり
時若事成れば其罪則ち彼惣大将ふあらん。然る時は是甚と不便といふ
べし。され朕惣大将とんとあへ。婦人の身とて似合か。然るも朕
先達より。幸ひは男子の相貌と扮作して。則ち此男子なる姿のゆゑ。て
朕惣大将といふ。上の神祇の靈と蒙り。下の群臣の助け不籍。強て雄に死
計略と巡ら。我日本の勢いと震る。波濤ととも難処と凌ぎ。財宝の國
と従へん事ある時。群臣共不功。有人若成る時。則ち朕獨り罪を
べし。と宣ふ。群臣一統ふ平伏て。皇后天下の為。宗廟社稷と安んせん。所以と計
りま。若不觉り。有る時。その罪臣等不及。がまの聖慮世ふあり
か。これとあり。謹んで勅答る。ふ皇后再び親ら。斧鉞と執て。三軍ふ命
令して。曰く。金鼓節き。旌旗錯乱する。これハ士卒整る。財と貪りて。欲
多く私と。内ふ顧る。これハ必敵の為。小虜とあらん。假令敵少くも

皇后小奉^{なま}ま^らば。皇后彼石^{かた}と^ら取上^とあつ^く。朕首尾^{あし}よく^か財宝^{たから}の国^{くに}と^ら後^{のち}へ^く
 還^{かへ}らん日^ひ。茲^{こゝ}に^て産^うま^はる^べく^して^の腹^{はら}へ^と挟^はま^りひ^き其^{その}上^{うへ}へ^ひけ^は楚^{しよ}と^ら帯^{おび}と^らあ
 る^べく^しる^べ。是^{こゝ}に^て世^よの^ち岩^{いわ}田^{でん}帯^{おび}の^ち濫^{らん}觴^{さう}を^て婦^め人^にの^ち夫^{おとこ}の^ち亂^{らん}と^ら胎^たせ^し後^{のち}に^て
 五^い箇^ご月^{げつ}や^りふ^して^は必^{かならず}に^て岩^{いわ}田^{でん}帯^{おび}と^らあ^らん^だ起^たま^り。後^{のち}恙^{あやま}なく^ち應^お神^ん天^{てん}皇^{こう}と^ら
 産^うま^はる^べひ^き彼^かの^ち腹^{はら}へ^と挟^はま^りひ^き石^{いし}と^らて^は此^{こゝ}に^て神^{かみ}と^らは^つり^かれ^るひ^き
 一^いが^つつ^り是^{こゝ}に^て鎮^{ちん}懷^{くわい}石^{せき}の^ち八^{はち}幡^{ばん}宮^{みや}と^ら唱^{とな}へ^し今^{いま}の^ち世^よの^ち顯^{けん}然^{ぜん}と^ら
 中^{ちゆう}山^{さん}寺^じに^て諸^{しよ}も^も皇^{こう}后^{こう}の^ち伊^い都^との^ち郡^{ぐん}伽^か田^{でん}と^らま^じり^かれ^る次^{つぎ}第^{だい}小^{せう}路^ろと^ら急^{いそ}ぐ^べく^しふ^べく^しあ^らる^べく^し白^{はく}
 砂^さの^ちいと^と奇^き麗^{れい}なる^べ濱^{はま}の^ちひ^きけ^は出^であ^らる^べく^し此^{こゝ}に^て皇^{こう}后^{こう}武^ぶ内^{ない}へ^ひけ^は宣^{のたま}ふ^べく^し朕^{ちん}
 婦^め人^にの^ち身^みを^てか^はし^て大^{だい}軍^{ぐん}と^ら引^ひ連^{れん}新^{しん}羅^らへ^と赴^{おもむ}く^べく^しと^らあ^らる^べく^し神^{かみ}祇^ぎの^ち告^つぐ^べく^し新^{しん}羅^ら
 と^ら我^{われ}日^ひ本^{にっぽん}へ^と送^{おく}へ^ん吉^{きち}相^{さう}よ^し今^{いま}此^{こゝ}に^て白^{はく}砂^さへ^ひけ^は松^{しょう}枝^えと^ら還^{かへ}る^べく^し日^ひま^でに^て青^{せい}々^{ささ}生^なま^すと^ら
 あ^らる^べく^しま^れば^は汝^{なんぢ}程^{ほど}よ^し松^{しょう}枝^えと^ら一^{いっ}枝^し手^て折^おれ^りと^ら命^{いのち}じ^まる^べく^し武^ぶ内^{ない}宿^{しゆく}祇^ぎの^ち畏^{おそ}む^べく^しか^はて^は
 遙^{とほ}く^しあ^らる^べく^し小^{せう}高^{こう}丸^{まる}場^ばの^ち松^{しょう}枝^え一^{いっ}枝^し手^て折^おれ^りと^ら皇^{こう}后^{こう}奉^たま^はる^べく^し皇^{こう}后^{こう}之^のと^ら手^て小^{せう}

取^と上^あの^ち根^ねも^も松^{しょう}枝^えも^も朕^{ちん}が^が此^{こゝ}に^て度^たの^ち進^{しん}発^{はつ}と^ら賀^がし^て活^いれ^りと^ら曰^いふ^べく^し直^{ちやく}地^ちり^り
 手^てづ^つり^り白^{はく}砂^さへ^ひけ^は松^{しょう}枝^えと^らせ^らる^べく^しひ^きが^が予^よに^て俄^は頃^{ころ}小^{せう}松^{しょう}枝^えの^ち青^{せい}々^{ささ}と^ら
 色^{いろ}と^ら會^あひ^あり^り忽^{たちまち}地^ち根^ねと^ら生^なま^すと^ら。ま^れば^は後^{のち}世^よの^ちま^で生^なの^ち松^{しょう}原^{げん}と^ら喚^{よび}ま^すと^ら
 此^{こゝ}に^て皇^{こう}后^{こう}自^{みづか}ら^らう^らま^せる^べく^しひ^き松^{しょう}大^{だい}木^{ぼく}と^らあ^らる^べく^し延^{えん}喜^ぎ年^{ねん}間^{かん}ま^で在^あら^るべ^くし^て其^{その}後^{のち}時^{とき}
 来^きり^りて^は枯^か果^{くわ}と^らあ^らる^べく^し其^{その}枯^か木^{ぼく}近^{ちか}世^よま^で猶^{なほ}か^はら^るべ^くし^て残^{のこ}り^りあ^らる^べく^し人^{ひと}々^々
 彼^かの^ち松^{しょう}の^ち朽^く木^{ぼく}と^らあ^らる^べく^し是^{こゝ}に^て守^{まも}り^りと^らあ^らる^べく^しと^ら。既^いに^に小^{せう}宗^{そう}祇^ぎの^ち歌^{うた}も^も
 是^{こゝ}に^て皇^{こう}后^{こう}の^ち軍^{ぐん}勢^{せい}と^ら送^{おく}へ^んひ^き肥^ひ前^{ぜん}より^り七^{しち}十^{じゅう}余^よ艘^{そう}の^ち船^{ふね}と^ら乗^{のり}出^でし^てあ^らる^べく^し
 對^{たい}馬^まへ^てい^いて^は折^あれ^りと^らあ^らる^べく^し風^{かぜ}あ^らる^べく^しと^ら。和^わ珥^にの^ち津^つに^て
 多^{おほ}くの^ち日^ひ數^{かず}と^ら過^すま^りと^らあ^らる^べく^し風^{かぜ}の^ちま^で待^{まち}ま^すと^ら

因^よに^に對^{たい}馬^まと^らい^いる^べく^し國^{くに}号^{ごう}の^ち則^{すなは}ち^ち三^{さん}韓^{かん}の^ち馬^ば韓^{かん}對^{たい}する^べく^し國^{くに}と^らて^はま^じり^り
 名^な付^けり^り馬^ば韓^{かん}と^らい^いる^べく^し百^{ひやく}濟^{せい}國^{こく}と^らあ^らる^べく^し。ま^れば^は對^{たい}馬^まの^ち和^わ珥^にの^ち津^つより^り。

